

第2章

物語としてのキャリア

—森の語り場—



3. ひきこもりも3年すれば 飽きてくる

リキは高校時代に不登校になり、それがきっかけとなって次第に家にひきこもるようになっていきました。それから丸3年間、彼は貴重な青年時代を自分の部屋で過ごします。私たちが出会った若者たちの中にもひきこもりの経験を持った者は少なくありませんが、リキのように本格的なひきこもりを経験した者は、むしろ少ないのかもしれない。

「ひきこもりも3年すれば飽きてくる」

リキは私たちに対して、そう話してくれました。それは、ひきこもりの経験者だからこそ言えるコトバであり、もうこれ以上のひきこもりはごめんだという切実な思いの表明でもあるのかもしれない。

ひきこもり生活も最初の1年目はよかった、とリキは言います。そして2年目にはだんだん苦しくなってきた、3年目は気が狂いそうになってきたと言うのです。そこで今回の語り場では、そんなリキのひきこ

もり生活のありのままの話を聞くことになりました。

塾長 「リキと昔のこととか、ひきこもってる間どういう生活を送ってたかはあんまり話したことが無いよな」

リキ 「僕もあんまり覚えてない」

塾長 「リキは今いくつ？」

リキ 「今22です」

塾長 「中学の時はバスケ部やったっけ？」

リキ 「うん」

塾長 「バスケをずっとやってて、〇〇高校に入ってたんやんな？」

リキ 「うん」

塾長 「〇〇高校の特進にも併願で受かってて、比較的まじめで賢い子やったと。〇〇高校に入ってバスケ部に入ったんやんな？」

リキ 「うん」

塾長 「〇〇高校を1年の終わりで行かなくなったと。その時からずっと家にいるようになったわけ？」

リキ 「まあ最後らへんはずっと家にいた」

塾長 「高2の頭、16歳からまるまる3年間はどこにも属さず、最後の方は家から出ることもなくという生活を送ってて、19歳くらいの時にここに来たのかな？」

リキ「うん」

塾長「ここに来るときに、初めお母さんが「うちにずっと家にいる息子がいるんです」という相談を電話でしてくれはった。連れて来てくださいって言ったんだけど、来なかったんやんな？」

リキ「いや、1回目は一緒に行ったと思う」

塾長「ほんと？」

リキ「一緒に来て、次来るのが2ヶ月くらい後やった」

塾長「そうそう、これもあんまりないケース。だいたい来たらすぐ次来るでしょう？彼の場合は来なかった。彼の場合は空白の2ヶ月があったけど、その2ヶ月は何してたん？」

リキ「何してたと言うか、まだ行く気分じゃなかったんじゃないですかね」

塾長「しばらくたって、私はお母さんに電話した。その後、連絡ないんですけど、どうしてますかって聞いたら、部屋片付けてますって。」

マナミ「出る準備？」

塾長「部屋がどんな状態になってたのかわからんだけど、片付けてますって。それからなんか夜に…」

リキ「散歩」

塾長「そうそう、散歩に行ってますって。空白の2ヶ月の間は部屋を片付けるのと、犬の散歩か。そういうことがあって2ヶ月後くらいにリキはやってくる。それはマナミちゃんが言うように、きっと出るための準備期間やったんやろな。出るのにやっぱり2ヶ月かかる」と

3年間のひきこもり生活から脱出するための彼なりの儀式、すなわちそれは、彼なりの通過儀礼だったのかもしれない。ひきこもり生活からそうでない生活への移行

は、リキにとって決して連続的なものではありませんでした。そこには彼なりの決心が必要だったのでしょ。部屋をきれいに片づけ、夜、人目を避けて犬の散歩に出歩くようになるのに、2ヶ月という時間が必要だったのです。それは決心に至るまでの準備期間だったのかもしれない。

多くのひきこもり状態の若者たちがそこから脱出していく時、そこには何らかの決心が伴います。つまり、ひきこもり状態からの再出発の起点が、この決心だと言えるのかもしれない。それがたとえ些細なものであっても、そこから彼らは変わり始めるのです。

村岡「なんで行かなくなったかとか、きっかけとかはなかったの？」

リキ「きっかけっていうか、なんというか中学とのギャップとか、先輩とかが嫌っていうのもあったんですけど…、部活辞めてから喋れなくなったりしたから」

塾長「部活はいつやめたの？」

リキ「1年の終わりごろ」

塾長「でもクラブはやめても、クラスはある？」

リキ「でもクラスはあんまり。他のクラスの子の方がよく喋るから」

塾長「クラスのメンバーも、あんまりよくなかったって感じなんか。でもそれで行かなくなるわけ？」

リキ「なんか面倒臭くなって。徐々に遅刻とかしてたんですけど。中学が楽しすぎたんじゃないですか」

塾長「中学、高校のギャップが大きかったと。そんな面白くなかったんか？」

リキ「うんまあ、微妙でしたね。面白い時もあった

たんですけど、なんか嫌になってくるとどん
どん嫌になってくるっていう」

塾長「その先輩が嫌ってのは、どういうことが嫌
やったん？」

リキ「いきなりキャプテンが来なくなったり、よ
くわからんことで1年全体的にいろいろ言
われるようなことがあったんで」

塾長「例えばどんなこと？」

リキ「例えばですか？よく覚えてないです」

塾長「まあよくわからんことで1年に、いちやも
んを付けてくるわけ？「お前ら何考えてんね
ん」とか、そういう感じ？」

リキ「うん」

塾長「先輩がとりあえず嫌やと…。それで面倒臭
いなっていうのもあって、ちょっとずつ遅刻
するようになって、2年からはまったく行か
ないようになったの？」

リキ「いや、1年の終わりにもう学校やめますっ
て。やめたくなったんでやめますって…」

塾長「そうなん。それは迷いもなかったの？やめ
ることに」

リキ「うん」

塾長「やめてどうやった？すつとした？」

リキ「最初は気が楽でしたよ。でも徐々にあの時
やめへんかったらよかったなって思いまし
た」

塾長「最初はそれでよかったと、でもだんだん後
悔してくるわけ？」

リキ「あんまりそういうこと考えないようにして
たんですけど、将来のこととか考え始めてか
らじゃないですか…」

塾長「学校行かなくなったら時間いっぱいあるや
ん。家には基本的に誰もいない。何をしてた
ん？」

リキ「1年目の時は、たまに出かけたりしてまし
たよ。適当にふらふらと」

塾長「たまに出かけるって、どんなところに出か
けるの？」

リキ「どっか立ち読みしに行ったり」

塾長「本屋に行ったりとか。でもあんまり行くと
ころがないじゃない？」

リキ「まあ行くところあんまりないですね」

塾長「すぐ暇になるよね。誰もいないし、しゃべ
るやつもない。友達との接触は全然なかつ
たの？」

リキ「どんどんなくなっていきましたね。自分か
ら連絡しなくなって」

塾長「ということは、だんだん孤立していくわ
け？」

リキ「うん」

塾長「喋るのは家族だけ、みたいなパターンにな
っていく？」

リキ「うん。でもお父さんとは全然喋らなかつた
んですけど。同じ家にいたのにほとんど夜中
に行動してたから、2年くらいはお父さんに会
わなかった」

タロウ「それは会わないように意識してたわけじ
ゃなくて？」

リキ「あんまり会いたくないとは思ってましたけ
ど。久しぶりに会った時は老けたなあ」と

塾長「2年も会わずに暮らせるものなんやな」

リキ「まあ僕のお父さんがそういうのにあんまり
無関心ってのもあるんですけど。なんか言っ
てきたりっていうのもなかったんで」

塾長「今は喋るんやろ？」

リキ「まあ普通に」

塾長「この前の家島の時もお父さんに送ってきて
もらってたもんな。どうですかみなさん？こ
こまでで聞きたいことは」

小牧「お母さんはどういう反応やったん？」

リキ「バイト行ったらとは言われましたけど、特
に行動はしなかったです。行動しなかったっ

ていうか、時間が経つと徐々に行動できなくなっただけというのがあったんで」

小牧「お母さんとは、会話してた？」

リキ「お母さんとは、会ったら会話してましたよ」

塾長「家にずっとひきこもり始めると、わりとすぐその生活ってきつくなってくるの？」

リキ「まあそうですね」

塾長「どれぐらいは大丈夫？」

リキ「1年くらいは大丈夫ですよ」

マナミ「部屋にずっといて何するの？」

リキ「寝たり、携帯でいろいろ調べたりとか」

塾長「そうや、ゲームはやってへん。パソコンもなかったんやんな？」

リキ「ありますが、そんなに使ってなかった」

塾長「ゲームやらへん、パソコンもしない」

マナミ「それも意外」

リキ「本読んだり、でも寝てる時間が一番多かったような気がします。なにもせずじぼーっとしてました」

塾長「2年目からは、外に出ることも無くなったって言ってたけど、それからの丸2年間は、ずっと部屋にいたの？」

リキ「うん」

塾長「居間にも行かないわけ？」

リキ「飯食う時ぐらいですかね」

マナミ「外に出たいなあっていう瞬間もなかった？」

リキ「ありますが」

マナミ「面倒くさい？」

リキ「面倒くさいと言うか、ずっと家にいていきなり出来ません。久しぶりに外出した時、近所の風景変わりがすぎてびっくりしましたもん」

マナミ「朝にお母さんが「起きや！」とかは無し？」

リキ「全然ないです。朝起きたらいつもだれもいないんですよ」

塾長「最初の方はあったんやろう？たぶん」

リキ「どうでしょう。全然覚えてないですけど」

タロウ「学校行き！とかなかったん？」

リキ「それは、もうやめた後やったから」

村岡「やめることを反対されなかった？」

リキ「全然されませんでした」

村岡「つらそうやったんかな？しょうがないかなって思われてたんかな？」

リキ「まあ好きにしたらっていう感じでした。そのあと定時制に行こうかなと思ってたんですけど、なんかうやむやになりました」

リキの場合、不登校になるきっかけは、クラブ内の人間関係でした。それは、ほんの些細なことでした。ところが高等学校の場合、義務教育とは違い、一旦学校を辞めてしまうと途端に様々な関係が切れてしまいます。学校との関係だけではなく、友達関係も含め、一気に疎遠になっていくのです。リキの場合、家族があまり積極的に介入しようとしなかったこともあり、短期間のうちにひきこもり生活へと入っていきま

した。

一旦ひきこもり始めると、あらゆることが悪循環を始めます。最初は、家族が何とか外へ出そうと働きかけていたことに対して疎ましく思い、何とか家に安心していられることを望んでいたのですが、いざ家にひきこもり始めると、それは思っていたような生活ではないことに気付くのです。何もやる事がなくなり、そうこうしているうちに、ひきこもっている自分自身が嫌になっていきます。自分に対する自信がなくなり、ましてや外へ出て行くことがとても大変なことに感じられ、ますます家にひき

こもると同時に、そんな風になっている自分がますます嫌になっていくのです。

家族と衝突することや、そんな家族を罵ったり、暴れたりすることもあるかもしれませんが、しかし、そうやっている自分もまたどうしようもなく嫌になってしまいます。生きている意味を感じられなくなり、自殺を考えるようにもなっていくのです。リキもその例外ではありませんでした。

塾長「話を戻すと、だいたいずっと家にいて、携帯やるか本読むか寝るか、それぐらいしか行動のパターンが無く、友達にも会わないという状態。2年目ぐらいからずっとそうになって、2・3年目になって気持ち的には変化していくわけ？」

リキ「気持ち的に…っていうか、性格が変わってきたかなとは思いますが」

塾長「どんなふう？」

リキ「こんなにネガティブやったっけとか、人と接するのが怖かったっけとか思ったりしました。ここ来た時、全然喋らなかつたじゃないですか」

塾長「やっぱり喋るのが怖かった？」

リキ「ずっと家にいて喋らなかつたつてのもあるんですけど、どうやって喋ればいいのかわからなくなりました」

塾長「昔中学の時は、そんなことなかった？中学の時は楽しかったつて言ってたもんな」

リキ「うん」

塾長「そんな状態になるわけか。「ひきこもりは3年もすれば飽きてくる」つて言ってたやんか。1年目はまずよかったと。2年目からかなり苦しくなってきた、3年目は気が狂いそうやったと。これ以上続けたら精神が崩壊するみ

たいに私に言ってたやんか？」

リキ「一時どうやったら楽に死ぬるんかなつて考えてました」

タロウ「それつてちょっと考えたことあるな」

レミ「あるある、普通に。薬飲んだら楽に死ぬるんかなあとか」

タロウ「まず死に方を模索して…」

リキ「やっぱ痛い嫌じゃないですか」

レミ「グーグルで検索しましたもん、私とか」

塾長「どうやったら痛くなく死ぬるか？」

レミ「そうそう、何が一番楽な死に方かみたいなの」

リキ「とりあえず睡眠薬のんで、屋上の所で寝て、寝がえりで死にたいなつて」

塾長「睡眠薬のんで、寝てて、ごろつてやつて、落ちて死ぬと」

一同笑い

リキ「ぼろつて落ちて、いつの間にか死んでるつて言うのが、僕のたどり着いた答え…」

塾長「一番面倒くさくない…なるほど」

レミ「私は寝てるうちに死にたいつて思いましたね」

タロウ「僕はシンプルに飛び下りればいかなつて思つて、ショッピングモールの3階ぐらゐから一気に落ちて死のうかなつて思つたことあります」

レミ「いや、それはなんか落ちる瞬間に痛いし、嫌やなつて思つて」

タロウ「痛みで気絶するかなつて」

レミ「恐怖心に負けるじゃないですか」

リキ「やっぱ僕の方法が一番だと思つますよ」

一同笑い

タロウ「いやいや、それはねえ」

リキ「一回目は無理でも、たぶん何回もやつてるうちにいけますよ」

塾長「何回かやつてるうちに成功するつて？」

タロウ「その前に飲みすぎで、死ぬんじゃない？」

レミ「慣れて寝れへんようになりそう」

タロウ「免疫できて？」

レミ「そうそう試しすぎて」

塾長「でもまあそうか。不登校になって、家にひきこもり始めると、やっぱりそういう風に死にたいって考えるんや…」

タロウ「僕はむしろあれやな、学校に行かへんようになる直前くらいにそう思ってた記憶はあるな。むしろ学校行かへんようになってから解放されて楽やった記憶がある、むしろ。学校に行かへんようになる直前が一番そう思ってたかな」

ひきこもり生活の3年目に自殺を考えていたことを実にあっけらかんと語り始めたリキ。すると仲間たちからも、次々と自分もそうだったという声が上がってきました。

不登校になりひきこもりの生活が長引くと、他者が介入しない分、どんどん考えがネガティブになっていくのかもしれませんが。これは何もリキに限ったことではなく、多かれ少なかれ誰もが抱く傾向なのでしょう。他者とのつながりが無いということは、自分の思い次第でその考えの方向性が決まってしまうということ。つまり、自分のバイアスによってさらなる自分のバイアスを作り出していくため、バイアスそのものが自動的に強化されていくのです。従ってこの状態から抜け出すためには、他者の関わりが必要不可欠なものとなります。バイアスそのものが更新されることが大事だからです。

今回の語り場で、自分と同じような思いをみんなも抱いていたことを知ったことは、

リキにとってこれまで思ってもみななかったことのようなものでした。生きていても仕方ないという究極の自己否定感は、自分だけが抱いていたものじゃないのだという思いが、リキの心をより開かせていくことになるのです。

塾長「ちょっとリキの話に戻るけど、リキのその精神的におかしくなって死のうかなっていうのは別にリキだけの話だけじゃなくて、タダシもそうやったし、みんな仲間でした。みんなそれは何度も考えるっていうのが普通みたいやね」

タロウ「考えてしまうよね」

レミ「うん」

タロウ「別に考えなくてもいいのに」

塾長「でも、その時に死なずによかったよね」

リキ「4年目いったら危なかった」

塾長「4年目危なかった」

タロウ「ここが救世主みたいなものやった？」

塾長「そう考えるとそうやね。それはやっぱり一回や二回じゃなくて、何回も思うわけ？」

リキ「思い始めるとずっと思いますけど」

塾長「ずっと思ってしまう…そうなんかもね。でも自分ではその状態から立ち直るための行動は出来ず？」

リキ「うんまあ」

塾長「八方ふさがりな状態なんやな。そういう意味では、お母さんがよく動いてくれたよな」

リキ「市役所で働いてる知り合いが、最初ここを紹介してくれはって」

塾長「そうやそうや、お母さんはその話を聞いてきて、リキに相談したわけ？」

リキ「こういうのがあるで、とは見せてもらったけど、その時はああそうなんみたい。その後、友達のエメールアドレス変更のメールが来

たんですよ。そこに名前と一緒に〇〇大学って書いてあって、ああもう大学生かって。そこからちょっと危機感を感じたっていうか。僕はずっと止まっていたのに、みんな進んでるんやって思い始めて、とりあえずお母さんにこういうところがあったよなって言って、6月ごろに1回ここに来ました」

塾長「はじめに聞いた時はピンと来てなかったけど、友達の進路がわかるメールが来た時に、前に聞いてたことがよみがえってきて、お母さんに働きかけるわけか」

リキ「選択肢がそれしかなかったですね。働くのも無理ですし」

塾長「でも、自分でアクション起してるわけや」

リキ「そこに行くって言い出したのは、僕だと思いますけど」

塾長「その一歩は大きいな」

リキ「なんでもいいから変えたかったんですよ。その生活を変えたかった」

塾長「そんなの、レミちゃんとかも一緒？」

レミ「一緒。ずっと暇でやる事がなくて、ずっと1、2年ぐらい家にひきこもってたんです。ネットとかやってなんとか暇をしのいでたんですけど、もうどうしようも無くなってきて、どうにか変えなきゃやばいと思って。1年目の時に、知誠館あるって聞いてたんですけど、その時なんかもう親とかの話聞きたくなくて。ほんとにイライラしてて、親に話しかけられても、話しかけないで、みたいな感じで。やっとな来てみたいな」

塾長「そういうタイミングってあるよな」

レミ「あと、その時思ってたのが、どうせ知誠館来ても説教されて終わるんやろうなって。どうせまた上辺だけ言われて終わるんやあって思って来れなかった」

塾長「会って、僕は説教してないわけ？」

レミ「いや、されたのかはわかりませんが。なんかまだちょっと理解力があるというか、上手く言えないですけど、他の人よりかはまだわかってくれはるなみたいな」

塾長「まあ今日改めて思ったのは、普通に学校行ってる高校生は、たぶん死にたいとかあんまり考えないと思うな。普通に生きてる人達っていうのは、ある意味そんなこと考えなくても生きていけるのかもしれない。学校に行ってることって何なんだろうとか、高校卒業するってことは何なんだろうとか、家族って何なんだろうとか、たぶんいろんなことを考える。つまりくからこそ考えてしまうって、それはすごい大事なことやなと思ったりするんや。他の人達があんまり考えないことをいろいろ考える、だけどたぶん自分一人だったら答えが出ない。けっこう難しいから。だからこういう仲間がいたり、そういうことを議論できる大人がいたりとか、そういうことが必要なかなと思う。そういう意味でそれぞれいろんな苦しみみたいなものがあるけれど、それはそれで大事なことかなと思ったりするんや。だから私に出来ることは、そういう経験をみんなしてきたとしたら、何か将来意味のあることにうまく使えないかなと思う。だからこういう場も必要やと思うんや。だってリキの話とかをきいたら、私も一緒やとか思うでしょ。リキはパティシエになろうって自分の道を決めたんや。働きながら料理の専門学校に通うために、今7時からアルバイトをしてお金貯めて。偉いでしょ、本当に。リキは、自分で自分の未来をつくってきたと、そういうことやと思うわ」

リキ「もう、ああいう生活は体験したくないですからね。ここに来だしてから友達に誘われて飲み会に行ったんですけど、友達によく復活

できたなって言われますからね」

塾長「そういうの聞くと嬉しいなと思うん？」

リキ「嬉しいですけど、すでに働いてる人とかも
いたんでやばいなとも思うかな」

塾長「でもかなり大変な状況から今の状況に復活
させたわけやから、リキにとっても大きな自
信やと思う。いいかげんなことばかり言っ
てるけど、えらいところもある」

不登校になって、あるいはひきこもりにな
って初めて考えることがあります。普段
は全く振り返ることのなかったことを、つ
まづくという経験があらためて気づかせて
くれる。そのように、問題が持つポジティ
ブな側面も存在するのです。問題をただ問
題として捉えるのではなく、問題を新たな
気づきへの機会として捉えることで新たな
局面が拓かれていくことを、私はリキの語
りを通して考えさせられることになるので
す。

タロウ「リキのここに来てからの変化とかは？」

リキ「ネガティブやったけど性格がもとに戻って
きた気がする。昔みたいに」

マナミ「どれぐらいで戻ったん？」

リキ「どれぐらい？やっぱり他の人と話し始めて
からやと思う」

塾長「リキにとって知誠館は、どういう存在な
の？」

リキ「通過点ですかね。でもここがなかったら本
当にやばかったですから、塾長は救世主です
ね」

塾長「ここの生活の中で、何が自分にとっては支
えや力になった？」

リキ「自分に近いような人たちがいたし、そうい
う人達との会話とか、塾長との会話とか、そ

ういう日常的なことじゃないですかね」

塾長「やっぱり同じ状況を共有出来る仲間がいる
っていうのは大きい？」

リキ「そういう人たちだけではだめだと思います
けど。マナミさん入ってきてから、スパイス
になってる」

塾長「マナミちゃんていうのは、どういう存在？
スパイスってものすごい抽象的な表現やけ
ど」

リキ「マナミさんは、知誠館の太陽でしょ？」

タロウ「マナミさんが引っ張ってるんですよ、
ここを」

塾長「あと聞いておきたいなと思うことある人？」

小林「高校を選んだ目的とかは、あった？」

リキ「やっぱり家から近いし、長く寝たいから」

小林「高校は行くっていう前提？」

リキ「もともと高校行って、大学行って思って
たから。目的はなかったけど、それが普通か
なって思っていました」

小林「3年間の経験から学んだなって思うことと、
これからどういう自分でありたいとかこう
なりたいていうのはありますか？」

リキ「自分から逃げてしまったような感じなので、
自分の嫌なこととかも我慢して逃げずにや
っていききたいですね。ああいう生活に戻りた
くないので、もっと前向きに考えていきたい
です」

「知誠館は通過点です」と淡々と答える
リキ。「嫌なことから逃げずにやっていきた
いですね」と決意を表現するリキ。そんな
リキのたくましさに、私たちは微笑まずに
いられませんでした。彼からこういった語
りが出るようになることもまた、彼自身が
自分と向き合った証なのです。変容は主体
的な営みとして成立するものですから、自

分と向き合うことが必須条件となっていくのです。

塾長「ではみなさん、一言ずつ感想を」

タカシ「すごい人生やなと思いました」

モモコ「うちも自殺しようかなって思ったことあるから、同じやなって思いました」

シンイチ「ひきこもってる間、退屈じゃなかったん？」

リキ「どんどんやることなくなってくるし、同じ本5、6回読んだような気がする。だから限界やったっていうのもある」

タロウ「これまで昔のこととか気になるけど聞きづらかったし、こういう時にリキ君を知れたのはとてもよかったです」

マナミ「自分でここに来ようと一歩踏み出したのは、大きかったんじゃないかなと思います。よく頑張ったね」

レミ「すごい共感する部分多くてびっくりしました。ひきこもりは、みんな同じこと考えるんやなと思いました」

小牧「始め来た時はほんとに喋らへんし、どうしようかと思ってたけど、勉強はものすごい丁寧やし、自分で一歩踏み出すタイミングがあるんやなと思いました」

小林「沈んだ状態から自分を見つめ直して、これから忍耐強くやっていきたいって言うって、今すでにそういう人になってる感じもするんですけど、この先ももっともったい男になってほしいなと思います」

村岡「リキ君はやさしいし、ほがらかやし、おだやかやっていうイメージ。勉強がすごく出来るという以上に人を和ませたり、楽しませることも出来るし、笑わせて輪をつくることも出来るし。そういう所がリキくんなんやなと思うし、今のリキ君がすごい素敵やし、今の

やわらかいままでも強くなってください」

塾長「いろいろこういう話をありがとう。みんなにとってもいい機会やったと思うわ。一つのライフストーリー、それぞれの人の過去の経験…今に至るまでのそれが貴重な経験で、みんなにとって大事な意味をもたらしてくれる、それぐらい良い経験をしてるんやと思う。そこから考えさせられたり、自分自身を振り返ったり。リキのことは、自分らにとっても大事なことになるなって思う。人生って楽しいことばかりじゃなくて、辛いこととか、苦しいこととか、投げ出してしまいたいこともやっぱりいっぱいある。越えられる苦しみもあったら、越えられない苦しみもある。ずっとそれを一生ひきずらなきゃいけない苦しみもあると思う。そんなことでも、全部かけがえのない経験で、そのことでものすごく投げやりになってしまう人もいれば、そういう苦しみがあったから何か自分を変えていけるという人もいて。そんなことをリキの話聞いてものすごく感じました。ここに来る時って言うのは、みんなほとんど動けない状態に来る子が多い。今度やる不登校を題材にした映画のキャッチコピーの中に蛹というコトバがあって、私もよくそう思う。ここに来た時というのはほとんど蛹の状態なんや。蛹の状態って何かと言うと、蛹の前は青虫でその後は蝶。蛹の期間はほとんど死んだ状態みたいなんや。だけど、こここのところで起きていることは何かと言うと、青虫の体を作ってた細胞がどんどん死んで、蝶の細胞がどんどん生まれていく。つまりこれは新しい命をつくるために、自分の命をどんどん殺していく過程なんや。ここまさに知誠館で起きていることっていうのはまさにそういう感じがするんや。だから、今までの過去の自分

の人生を殺していく、いい意味で自殺なんかかもしれない。普通の自殺やったら、ただ死ぬだけや。でもここでは新しい命が生まれていくわけや。そういう風なことに私自身は出会いたい。出会って感動したい。それは君らから感動をもらうようなものやと思うわけ。まさに蛹のタイミングというのか。だからここは居場所じゃない。ここにずっといれるわけじゃない。蛹はある期間で終わるんや。一生蛹やったらあかん。だから私たちはあるタイミングで出会って、あるタイミングで別れなあかん。だからこそ君らはそうやって変わっていくのかなと思った。そんなことを、今日のリキの話を聞いて改めて思いました。良い話をありがとう」

「セカンドキャリア」というコトバがあります。読んで字のごとく、それは「二番目のキャリア」という意味です。今の社会の中では、ファーストキャリアがその個人の人生を決定するという保証はどこにもありません。リストラ、解雇、人間関係のトラブル…。様々な状況が、そのファーストキャリアの終焉を告げる可能性を作り出していきます。私たちは、当たり前のように挫折を引き受けながら生きていかざるを得ない状況に身を置いているように思います。だからこそ、壁に頭を打った状況から、いかに自分自身を再出発させるかという能力が求められているのです。これが「セカンドキャリア」というコトバの中に含まれている大事な意味なのです。

不登校やひきこもりの経験を持つ若者たちは、まだ十分な能力や十分な準備のない状況で、大きな挫折を味わうことになりま

す。しかし彼らがその挫折経験から立ち上がることができたなら、それは彼らにとって、セカンドキャリア形成へと向かうかけがえのない経験になっていくように思います。先にも触れましたが、それはどうしようもなかった問題が、大事な意味を持った機会へと変わっていく瞬間でもあるのです。

リキの語りは、確かにみんなを感動させました。彼の変容の大きさが多くのことを物語っていたのです。リキの話を、私は蛹の変容の話で締めくくります。そして、蛹の期間がどこかで終わると同じように、いつかは知誠館を巣立っていく必要があることを告げます。ここは居場所じゃないということを了解しておくことは、とても大事なことなのです。私たちは、限りある中で出会い、限りある中で互いに影響を及ぼし合い、そして限りある中で巣立っていくからこそ、限られた時間枠の中で精一杯変容を遂げていくことができるのです。

